

— 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(六十点)

高校三年生の川瀬宙は母(花野)と二人で暮らしている。母の幼なじみの佐伯恭弘(やつちゃん)は、近所の商店街で妻(智美)と母(直子)と洋食店を営んでおり、宙にとっては父親代わりの存在だった。あるとき、佐伯が交通事故に巻きこまれて亡くなってしまう。

「じゃあ、おやすみ。またね」

手をふり、*遠宮が去って行く。その背中を見送りながら、わたしも進まなきゃいけないのだと宙は思う。きつと、いつまでもここで停滞してはいけけない。やつちゃんの死を抱えて、わたしなりに前を向いて生きていかなきゃいけない。みんな、そうしているのだ。もう一度、空を仰ぐ。①宙は長い間、星々をにらむように見つめ続けた。

日曜日の朝早く、宙は佐伯家を訪れた。出迎えた直子は、宙のいでたちを見て不思議そうに首を傾げた。

「どうしたんだい、宙ちゃん」

「お店を、使わせてください」

ジャージにスニーカー、掃除道具を提げた宙は、深々と頭を下げた。

「お店って、何をするつもりだい？ 悪いけど、もう、開ける気はないんだよ」

「分かっています。あの、少しだけ、貸してもらえませんか」

お掃除もします、そう言うと、直子は少しだけ考えるそぶりを見せた後、「いいよ」とうなずいた。

「他でもない宙ちゃんだし、恭弘だって嫌とは言わないだろうさ。好きにしてちょうだい」

「ありがとうございます！」

鍵を預かって、店に回る。数ヶ月前までぴかぴかに磨かれていたドアノブや窓ガラスが汚れているのを見て、宙の胸がぎゅつと痛んだ。泣き出しそうになるのを堪え、店内に入る。

いつだっていい香りに満ちていた店内は空気がよどみ、どこかほこり臭かった。窓際の花はすべて枯れ、土の表面がひび割れている。佐伯が亡くなった後、誰も手入れする余裕がなかったのだろう。

厨房に足を踏み入れて、宙は息を呑んだ。きれいに磨き上げられていたコンロは薄くほこりが載っていて、佐伯が休憩中に愛用していた丸椅子はころんと倒れたまま。どうしてだか床にフライパンが転がっていて、シンクの中にはいつものかもしれないガラスのコップがあった。

初めてここに入ったときに感じた空気、香り、すがすがしさが、かき消えていた。清涼な雰囲気せいりょう かんいきに満たされ、大好きだと直感した場所。たくさんの幸福な思い出と味があつた場所が、主を喪うしなつて静かに朽くちようとしている。

②「やつちゃん……」

熱のないキッチンaの中央で宙は少しだけ立ちつくし、それからぶるんと頭をふつた。わたしはここに、**カンシヨウ**に浸ひたりに来たわけではない。

持ってきた荷物の中から、宙はエプロンとゴム手袋てぶくろを取り出し出した。掃除道具入れからモップやバケツを取り出し、買ってきた雑巾ぞうきんをさぶざぶ洗う。店内の窓を全て開け放つと、初冬の冷えた風がびゅうと舞まいこんだ。空気が洗い清められていく。

「よし」

雑巾と掃除用洗剤を手に、宙は小さくつぶやいた。ここを、かつてのようにぴかぴかにしてやる。

窓を拭ふき、ドアノブを磨く。椅子にテーブル、床を丁寧ていねいに拭き上げる。鉢植はちえの枯れた花を処分し、生花店に走った。華はなやかな**ハナタバ**を作ってもらい、それを店内の様々なところに生けた。キッチンも、店内と同様に磨き上げる。スイッチの切られた冷蔵庫から、換気扇かんきせんまで。

夢中で掃除をしていると、出入り口ドアにつけられたカウベルが鳴り、「川瀬さん」と声がした。キッチンから店内に顔を出せば、遠宮が立っていた。片手に買い物袋を提げている。

「言われた通り買い物してきたけど、何してるの」

「え、もう来てくれたの？ 早い！」

「いや、指定された時間通りだけど」

遠宮が壁掛け時計を指し、時間を見た宙は「うわあ」と声を上げる。

「もうこんな時間！ 掃除に熱中してた」

「何するの、ここで」

「ちよ、ちよと待ってね。そこらへん、座すわってて。掃除したから、きれいでしょ」

掃除道具を片付け、汚れてしまったエプロンを脱ぬぐ。佐伯がいたところと同じくらいきれいになった店内、キッチンを見回して、宙はうなずいた。それから新しいエプロンを身に着ける。

「準備は、整った」

宙は、ふう、と深く息を吐はく。これが、わたしの第一歩。わたしだって、前に進むのだ。

「ねえ、何するのさ。いい加減教えてよ」

「パンケーキを、作るの」

きつぱりと、宙は言った。

古びてぼろぼろになったノートを、丸椅子に置いた。一ページ目を開く。子どもの拙い字が並んでいるのをそっと撫でて、宙は「見ててね」とつぶやいた。

卵、牛乳。小麦粉に砂糖、バニラエッセンス。バターにイチゴジャム、メープルシロップ。

割った卵を手際よくかき混ぜながら、宙は思い返す。幼かったころ、佐伯がここでこうしてパンケーキを作ってくれたことを。魔法のように手際よくメレンゲを作り、ふわふわのパンケーキを作ってくれた。哀しくてつぶれそうな心をふわふわにしてくれた、魔法のパンケーキ。甘い湯気の向こうの笑顔を、いまでも覚えている。

「へえ、すげえ。うまいもんだね」

「ねえ、遠宮くん。智美さんと直子さんを呼んできてくれるかな。お店の方の出入り口から入ってって言ってね。それから、接客業の経験ある？」

訊くと、遠宮は察したらしい。少し困ったように頭を掻いて「文化祭のときにちよつと。まあ、善処するよ」と言った。

佐伯ジキデンの焼きたてのパンケーキを、この店で食べてもらいたい。*あの日、自分が貰った愛情とやさしさを、いま返すのだ。

フライパンにバターを入れ、ほどよく溶けたところでいったん濡れ布巾の上に載せ、温度を調節する。ふたたび火にかけて、もったりした生地を流しこむ。

『いいぞ、宙。うまいじゃん』

どこから声が聞こえた気がする。ああ、そうだ。あのときそう言って、教えてくれたんだ。鮮やかに蘇る。

やっちゃん。ねえ、やっちゃん。ありがとう。やっちゃんがくれた思い出は、やっぱりいまでもわたしをやさしく包んで、わたしをわたしでいさせてくれる。

甘い香りが満ちるころ、カウベルが鳴った。

「あら、いい匂い……」

「本当、ですね」

戸惑うふたりの声がする。

「お席へどうぞ。ええと……あの窓際はどうぞでしょう。花がきれいだ」

遠宮くん、ナイス。そこはサエキの一等いい席で、わたしもそこに座ってほしいと思ってた。宙は心の中でガッツポーズをして、それから焼き上がったパンケーキを皿に移した。

パンケーキを載せたトレイを手に、ふたりの許に向かう。

「お待たせしました。やっちゃんの、パンケーキです」

きつね色に焼けた、ふつくらとしたパンケーキは、我ながらいい出来だった。かつて佐伯が作ってくれたものと、きつと変わらない。香りも、味も。こめた思いも。

「まあ、宙ちゃんが作ったの」

直子が目を細める。

「恭弘が作ったみたい。そっくり。ここまでふわつとさせるのって、難しいのにねえ」

懐かしそうに言う直子の正面に座る智美は、目の前に置かれた皿をじっと見ていた。

「智美さん、食べてください。このパンケーキは、元気の出る魔法のパンケーキなんです。初めて食べたのはわたしが小学校一年生のときで、これを食べて元気になったんです。やっちゃんってすごいと思って、レシピを教えてもらって、何度も作ってきた」

智美はぼんやりと、皿を見つめる。その目には感情の色が見えない。わたしじゃだめなのかと足元がすつと冷えたけれど、宙は続けた。

「きつと、美味しいから。だから、食べてみてください」

自分のしていることは、間違っているかもしれない。こんなことじゃ、智美の心は少しも癒されないかもしれない。でも、信じたい。このパンケーキは元気の出る魔法のパンケーキだと。

宙はパンケーキにバターをひとかけと、クジラ印のイチゴジャムを載せた。

「これ、いつもわたしが食べていた組み合わせです。って、やっちゃんのイチゴジャムは手作りだったけど……。いいイチゴがなくて」

ひとくちでいい、食べてほしい。そう願いながらフォークとナイフを渡すと、智美はのろりと受け取った。それから小さく切り分け、口に運ぶ。

ゆつくりと咀嚼した智美の目から、涙があふれた。その涙を拭うこともせず、智美はパンケーキにフォークを刺す。次のひとくちは、大きかった。

「……の味ね」

果たして、智美がぼつりとつぶやく。

「え？」

「恭弘さんの、味ね。恭弘さんの、やさしい味」

泣きながら、智美が言う。私、この味に救われたの。おかげで生きてこられたの。恭弘さんと一緒に、この味もなくなったと思ってた。でも、違うのね。あのひとは、ここにいた。そして、残せるのね。じゃあ私も、恭弘さんを残していけるのかしら。

直子がその言葉にうなづく。

「当たり前だよ、智ちゃん。だから生きていこうよ。ね」

智美はそれにゆつくりうなづく、それから隣となりに立つ宙を見上げた。濡れた目に、これまでにはなかった光が e ヤドe っている。

「ありがとう、宙ちゃん。私、もう大丈夫」

その言葉に、宙は耐たえきれずに泣いた。

③ やっちゃん、わたし、進めそうだよ。

(町田そのこ『宙ごはん』小学館)

*注 遠宮||宙の高校の同級生。

あの日||小学一年生の頃ころ、母親の花野と大喧嘩おおげんかして泣きじやくる宙に、佐伯はパンケーキを作った。そのパンケーキはとてもおいしく、宙を元気にし、花野と仲直りするきっかけになった。

問一 a のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 — 線部①とありますが、ここから読み取れる宙の心情を説明しなさい。

問三 — 線部②とありますが、ここから読み取れる宙の心情を説明しなさい。

問四 — 線部の後の場面から読み取れる、智美の心情の変化の説明として最も適切なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 夫も夫の作る料理の味も失ったと深い悲しみにくれて生きる意味を見失っていたが、宙の作るパンケーキに込められた思いに触れ、夫のやさしい味が受け継がれていることに感動し、大切な人の存在はその死後も残せると気づき、生きる希望を持てるようになった。

イ 夫が死んだことで、その料理の味も永遠に失われてしまったと思ひ込み、宙が夫の料理を再現しようとするにも否定的だったが、宙の作るパンケーキが夫の味そのものであったことにおどろき、宙が立派に成長したことを心からうれしく思うようになった。

ウ 夫の死によって、夫の料理の味が失われてしまったことになげき絶望していたが、宙の作るパンケーキから夫の料理を思い出したことで、死んだあとも夫は自分の心の中に生きていることを確信し、夫の料理は自分が引き継いでいこうと考えるようになった。

エ 夫の作る料理のやさしい味は、夫にしか生み出せないと思ひ、その死を悲しむばかりだったが、宙が作るパンケーキを目にした瞬間、夫の味を再現しようとする懸命な努力に気づき、妻である自分も夫のために何かしたいと前向きに考えるようになった。

オ 夫が死に、慣れ親しんだやさしい味が失われたことを悲しむあまり、宙が自分を心配して作ったパンケーキにすら関心を持っていないでいたが、パンケーキに夫の作る料理の面影を感じたことで、宙の深い悲しみに気づき、宙と共に生きていこうと思えるようになった。

問五 — 線部③とありますが、ここには宙のどのような思いが込められていますか、説明しなさい。

問六 本文を読んだ先生と生徒AとCが会話しています。会話文と資料を読み、後の問いに答えなさい。

生徒A 先生。この小説のブックカバーの裏にこんな文章がありました。

生徒B ぼくにも読ませて。へえ、おもしろいなあ。やっちゃんと宙が初めて出会ったときの話なんだね。

生徒C それならやっちゃんが宙に魔法のパンケーキを作るもつと前の出来事と考えられるね。

先生 おもしろいものを見つけたね。その文章と本文とを読みくらべて見ようか。

「さあ、食べて」

出来上がったものは、我ながら満足のいく仕上がりになった。宙は「いただきます」と丁寧に両手を合わせてから、フォークでパスタを口に運んだ。小さな口が咀嚼するのを、オレはじつと見守る。少しの時間ののち、口の端にソースを少しつけた宙が、顔を綻ばせた。

「おいしい」

心はまだ完全にほぐれていない。しかし味わっている顔にははつきりとした喜びがあつて、ただただ可愛かった。

ああ、この子をこれから生かしていくのはオレの料理なんだ、と唐突に思い至った。背中に電流が走ったかのような、激しい衝撃にも似た気付きだった。

料理人になったことに、大した理由はない。やりたいことも就きたい仕事もなく、料理は昔から嫌いじゃなかったし、オヤジの店でも継げばいいかと安易に料理人への道を選んだのだ。いまでも、別段仕事に情熱があるわけではなかった。働かなければ生きていけないから、続けているだけとも言えた。だけどいま初めて、この仕事を選んでよかったと思つた。大事な意味のある仕事なのだ、ようやく知つた。オレの仕事は、誰かを豊かに生かし育てるものだ。

彼女を見ると、「よろしくお願ひします」とゆつくりと頭を下げた。

「あたしなりに母親やってみるつもりだけど、手伝つてくれるとうれしい」

顔を上げた彼女は、娘とよく似た顔で微笑んだ。その顔を見て、少しだけ、泣きそうになつた。

「……がんばるよ、オレ」

自分に言い聞かせるように、つぶやいた。そして、胸の中で誓う。

オレは、宙が育つための料理を作っていく。彼女が——花野さんが生きるための料理を作っていく。そして、このふたりがしあわせに過ごす時間に、オレの料理があればいいと思う。美味しいねと笑いあうのがオレの料理なら、こんなにしあわせなことはない。

問 生徒AとCが本文と資料について話し合いました。本文と資料から読み取れることとして適切でないものを、次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 生徒A 本文だけだと、やっちゃんの思いは想像するしかなかったけれど、資料があることによって、やっちゃんが実際にどのような思いで宙に接していたのかも分かるようになっていいるよ。

イ 生徒B もともとやっちゃんは情熱を持って料理人をしていたわけではなかったけれど、宙との出会いにより、自分の仕事に対するやりがいを見つけたことができたと言ひ取り取ることができるとよ。

ウ 生徒A 宙と初めて出会った日が本文で出てきた「あの日」だね。やっちゃんの家族にパンケーキを作ることは、「あの日」にやっちゃんからもらった愛情とやさしさへの恩返しと読み取れるね。

エ 生徒C 本文は宙の視点から描かれていて、資料はやっちゃんの視点からの文章だね。この両方の文章を読むことで、私たち読者は二人の考え方に共通点があることに気づくことができるね。

オ 生徒B 二人の考え方に共通点があるということは、やっちゃんは宙に愛情を持って接しただけでなく、料理には人生を変える力があるのだと教えることに成功したと考えることができるよ。

カ 生徒C 作者があえてブックカバーの裏にやっちゃんの視点からの物語を描いたのは、宙がやっちゃんの料理と思いを自然と受け継いでいく過程を読者に気づかせるためだったと言えるよ。

「*コンテンツ」という言葉があります。音楽や映画といったエンタテインメント表現を指して使われることが多い言葉ですが、書物や放送番組、インターネットで見聞きすることができるさまざまな情報も指しますし、最近では大学の講義でさえ「コンテンツ」と呼ばれることが少なくありません。大雑把に言えば「情報のひとまとまり」くらいの意味で広く使われている言葉です。

コンテンツという言葉が日本語に定着したのはさほど古いことではありません。新聞記事データベースなどで調べてみると、「コンテンツ」は、90年代なかば頃に日本語の空間の中に急浮上してきた言葉だとわかります。それまでの「作品」や「楽曲」、「番組内容」といった言葉をひとまとめに塗り替えるように「コンテンツ」という言葉は流布しました。

言葉の変化とは、単に「同じものを違う言葉で指すようになった」ことではありません。一つの、あるいは複数の言葉が別の言葉にとつてかわられるとき、その背景には社会の「ものの見方」の変化が横たわっています。言葉の変化は社会の変化です。

コンテンツという言葉の浮上は、社会における文化や知識をとらえる枠組みの変化を示しています。それをもたらしただ要因の一つはインターネットの社会への普及でしょう。1995年はウインドウズ95が発売され、パソコンからのネット接続が容易になった年です。インターネットは異なった種類の多様な表現や知識をデジタルデータという共通の状態に*還元することで、情報の流通を著しく便利にしました。かつては別々のメディアによって支えられ、各々異なるかたちでわれわれの思考や感性を形作っていたさまざまな知識や文化表現は、90年代なかばを境としてデジタルデータのかたちで一括して扱われ、消費される傾向が進んでいくことになります。

「コンテンツ」という概念は、知識や表現の質的な違いよりも、それが「ひとかたまり」の情報として同等に扱えることを強調します。書物と放送番組が同じく「コンテンツ」であると名指されるようになると、それを評価する観点もまた似通ってきます。かつては、書物とテレビ番組は別のメディア、別の世界、別の価値基準に属するものでした。テレビ番組であればそれは速報性によって評価され、書物であればそれが人間の知性にどのように深い影響を与えるかにより評価されました。

しかし「コンテンツ」として同一のスマートフォンで視聴される対象になれば、その区別は融解していきます。「おもしろいか」「泣けるか」「笑えるか」。あるいは送り手にとつては、そのコンテンツがどれだけ「売れるか」。異なるメディアに隔てられ、異なる基準により評価されていた知識や情報や表現は、今や横並びに測られるようになりました。

かつては、知識とはそれとの長い格闘の末に身につけるものでした。それが「コンテンツ」と呼ばれるようになってから、教育のあり方も変化したように感じます。何かのために必要な知識は、どこかに「コンテンツ」として存在しており、必要ならそれを見つけて「アクセス」

しさえすればいい、という感覚が、学生や社会に浸透したように感じます。

先に触れた、「カリキュラム通りに学生をしつかり勉強させる」ことを目指した大学「改革」の背景にあった考え方は、私の考えでは、知識や能力を「コンテンツ」としてとらえる考え方です。学費を払った分に見合うだけの知識や能力が得られる場として、つまり、「知」を商品のように取引するような場へと大学は変化させられてきました。

しかし、大学教育は「コンテンツをインストールする」ことは本質的に異なります。皮肉なことに、コロナ禍によって大学に通えなくなり、「オンライン授業はうんざりだ」「早く大学を再開してくれ」と声をあげる学生たちこそが、そのことに気づきつつあるのかもしれない。

教育内容にコンテンツが、オンライン授業のかたちで学生に伝達されている現在の大学の状況は、いわば（政府が、あるいは社会が理想とした）「勉強に純化された大学」です。授業と授業の間の移動時間や、友人との雑談や、*サークル活動などといった「勉強と直接関係ない」要素をすべて排除した、純化された「知識コンテンツのインストール」に多くの人々が不満を漏らしている。この事実、勉強以外の無駄なことがむしろ大学の本質であったことを示しているのではないのでしょうか。

いえ、もつと強く言いますよ。「①大学は勉強するところではない」のです。

大学とは「学術の中心として、高い教養と専門的能力を培うとともに、深く真理を探究して新たな知見を創造し、これらの成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与する」（教育基本法第7条）と定められている制度です。「新たな知見を創造し」というところがポイントです。大学とは「まだ存在しない知」を生み出すことこそがその存在根拠なのです。

つまり大学とは、知識を商品のように学生に売るところではありません。また、知識を持った「人材」を育成して企業に送り出すためのところでもない。そうではなく、大学とは、一人一人の学生の知的成長を促すための場所や機会を提供することで、社会にとって必要な知を維持し、そこから新しい知を生産するための場です。

それはハードディスクにソフトウェアをインストールすることよりも、公園で子供たちが創意工夫して遊んでいる状況に似ています（教員や図書館は「ジャングルジム」のような遊具に似ています。その「使い方」に定まった決まりはありません）。「知」とはデジタルデータではなく、身体と感情を持った人間一人一人が身につけ、実践し、対話し、試行錯誤する中でしか「役立たない」。大学とはそのために用意された場です。新型コロナウイルスが社会にもたらした「良い影響」がもしあったとするならば、ただオンラインで勉強だけすることが「大学の学び」ではない、ということに人々が気づいたことではないでしょうか。

コロナ禍がわれわれに教えたことは、このような経験したことの無い難局に対するために必要な知とは、すでに誰かによって形作られパッケージされている「コンテンツ」ではありえない、という簡明な事実です。われわれはメディアで発言する専門家の意見の「食い違い」を日

常に目にしています。ある専門家は「PCR検査を拡大すべきだ」と主張し、別の専門家は「無闇な検査は控えるべきだ」と言う。あちらの専門家は「いち早く都市をロックダウンすべきだ」と言い、こちらの専門家は「経済への悪影響を考えるべきだ」と言う。

われわれはこのコロナ禍を解決してくれる解決策がどこかにあるはずだ、と信じた。しかしそんなものは「まだ」どこにもない。コロナ禍を乗り越える知見はコンテンツとしては「まだ」存在していません。それは身銭を切って必死に考え、調査し、研究している「誰か」がこれから生み出す「かもしれない」ものです。それを担うのが②「知」の仕事であり、大学の仕事なのです。

(増田聡「『大学の学び』とは何か」『ポストコロナ期を生きるきみたちへ』晶文社)

*注 コンテンツの内容。情報の中身。とくに本の内容や、インターネットなどの情報の中身をさす。

還元もとにかえること。また、もどすこと。

サークル活動共通の趣味などを楽しむ活動。

問一 ——線部①とありますが、「大学は勉強するところではない」のはなぜですか。八十字以内で説明しなさい。

問二 ——線部②とありますが、「知」とはどのようなものだと考えますか。あなた自身の体験にもとづいて、二三百字以内で書きなさい。

(このページで、問題は終わりです。)

